

# 幼稚園・保育実習に対する短期大学生の不安感 — 不安感構成要因の学年による差異の検討 —

田中 浩二・馬場 康宏

## I はじめに

平成27年現在、全国で640の指定保育士養成施設があり<sup>1)</sup>、保育士資格を取得するためのカリキュラムが編成されている。また、幼稚園教諭免許状を合わせて取得する大学等も多く、その場合、4年間あるいは2年間の間に相応の期間での実習が求められることになる。本学でも保育士資格と幼稚園教諭免許状を取得しようとする、2年間に幼稚園や保育所等でおよそ2週間(12日間)の実習を5回経験する。資格・免許の取得や保育・幼児教育の現場で働くことを志して入学してきた学生が目標を達成することは、保育者養成校の教職員の願いでもあり、そのための努力や工夫を日々行っているところである。しかしながら、実習において、不安を抱きながら実習に臨む学生が多いことはもちろん、不安が大きすぎた結果によって資格や免許の取得をあきらめる学生も散見される現実がある。

そこで、本研究では実習に対する不安感を構成する要素に焦点をあて、学年の違いによって不感を感じる要素の変化を探ることで、今後の実習に向けた指導の方法を検討することを目的とした。

## II 方法

### 1. 対象者

調査対象は保育者養成短期大学に在籍する学生を対象とした。

### 2. 調査方法

調査内容については、幼稚園教育実習および保育所実習への不安および期待について記述式の予備調査を行い、予備調査から得られた内容をもとに、不安に関する37項目、期待に関する23項目を設定し、学年や性別等の基本情報と合わせて質問紙により回答してもらった。不安および期待に関する項目については、「まったく当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらともいえない」「やや当てはまる」「よく当てはまる」の5件法により実施した。

調査は、2015年7月に実施した。

なお、調査の実施にあたっては数量的に処理するため個人が特定されることはない旨および成績等の評価には一切影響を及ぼさないことを説明した。

### 3. 分析方法

分析方法については、まず「不安感」や不安感に関連する項目について学年の差異を検討するために、学年別での $\chi^2$ 検定を行った。

さらに、不安の内容を詳細に検討するために共分散構造モデルを用いて学年別による多母集団同時分析を行った。共分散構造モデルを作成する際、馬場・田中の先行研究による項目

の選定と因子分析の結果を指標とした。その際の手続きとしては、不安に関連する37項目で因子分析を行い、因子抽出の方法としては最尤法、プロマックス回転を用い、因子数を4因子とした。その後、因子分析によって得られるパターン行列から、負荷量がいずれの因子に対しても.40に満たない項目および、複数の因子に対して.35以上を示した項目を除外した<sup>2)</sup>。次に、因子分析によって得られた解を基準に「不安感」と不安に関連する項目の共分散構造モデルを作成した。共分散構造モデルの適合度にはGFI、AGFI、RMSEAを用いた。初期モデルで十分な適合度を満たさない場合には、不安に関連する項目に付される誤差変数間を共分散で結ぶことで適合度が高くなるようにモデルを探索した。

統計処理にあたっては、SPSS ver. 23およびAmos ver. 23を使った。

### Ⅲ 結果

#### 1. 対象

保育者養成短期大学に在籍する学生に調査を実施し、319件の回答が得られた。そのうち、学年および性別等の基本情報、さらに本分析に関連する不安感に関する項目すべてにおいて未回答であった2件を除外し、項目群内での未回答については変数内の平均値を当てはめることにより対応した。その結果、317件を対象として分析を実施した。

分析対象となる317件の特性は次に述べるとおりであった。学年は1年生132名(41.6%)、2年生185名(58.4%)であった。性別は、女性316名(99.7%)、男性1名(0.3%)であった。

#### 2. 学年による不安感の結果と学年による相違

「不安感」と不安感に関する37項目の結果の度数および学年による各項目の $\chi^2$ 検定の結果を表1に示した。「不安感」に関しては、約7割で「やや不安」と「とても不安」と回答しており、実習に対する不安感の大きさが伺えた。不安に関連する37項目においても、多くの項目で「やや不安」および「とても不安」と回答していた。さらに、学年別による回答の相違については、「不安感」をはじめとして、不安に関連する37項目中29項目で有意な差が見られた(表1)。

#### 3. 実習に対する不安感の構造化

学生の実習に対する不安感の構造化を行うにあたっては、馬場・田中によって行われた不安に関連する項目設定および因子分析の結果を用いた<sup>2)</sup>。馬場らの研究において、不安に関連する項目の構造として、調査された37項目中26項目を用い、4因子で表現することで最適な解を得られるとしている。そこでの因子は、第一因子は「子どもへの対応不安」、第二因子は「部分・責任実習不安」、第三因子は「実習生適応不安」、第四因子は「体調管理不安」とそれぞれ命名されている(表2)。

因子分析の結果を参考に観測変数の1つである「不安感」へのパスを想定した共分散構造モデルを作成した。モデル内のパス係数は標準化推定値として示し、モデルの適合度指標としてはGFI、AGFI、RMSEAを用いた。モデルの適合度を上げるために、不安に関連する

項目に付される誤差変数間を共分散でつないだ後、分析対象全体の適合度指標は、GFI=.89、AGFI=.86、RMSEA=.049となり、概ね当てはまりの良いモデルとして示された（図1）。なお、パス係数は有意なものだけを示し、各観測変数や潜在変数に関連した誤差変数の表示は省略した。各潜在変数から不安に関する各項目へのパスではすべて有意な結果を示し、各

表1 不安感および不安に関する項目の回答（度数）および学年による比較

項 目	まったくあてまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	ややあてはまる	とてもあてはまる	p 値 <sup>(注1)</sup>
不安感（注1）	2	46	38	13.3	98	.00*
不1：子どもの状況にふさわしい声掛けができるか不安だ。	2	47	44	156	68	.00*
不2：実習期間終了まで、自分の体力がもつか心配だ。	30	90	55	79	63	.00*
不3：子どもが興味・関心を持っていることを自分が知っているか不安だ。	9	62	92	126	28	.00*
不4：実習園の先生方に厳しく注意や叱責を受けるのではないかと心配だ。	13	45	70	100	89	.00*
不5：実習生としてふさわしい服装や振る舞いができるか不安だ。	38	126	63	67	23	.00*
不6：部分実習用の絵本や紙芝居は、適切なものを選択できるか心配になる。	9	62	72	129	45	.00*
不8：先生に礼儀正しく振る舞えるか不安だ。	34	88	86	81	28	.02*
不9：一人で実習に行くことが不安だ。	48	78	48	82	61	.00*
不10：実際にオムツ替え・衣服の着脱や食事の援助ができるか不安だ	16	49	57	130	65	.03*
不11：大きな声を出して保育ができるか不安だ。	50	95	67	70	35	.02*
不12：指導担当の先生と良好な関係が築けるか不安だ。	8	36	73	128	72	.09
不15：実習期間中、睡眠時間を十分に確保できるか心配だ。	4	21	31	92	169	.02*
不16：実習期間中に、体調を崩さないか心配になる。	17	36	41	102	121	.36
不17：給食の時、自分の苦手なものが入っていたらどうしようかと思う。	142	63	43	43	26	.23
不18：部分・責任実習で、自分が計画した活動を子どもが楽しんでくれるか心配になる。	3	11	39	133	131	.34
不20：実習中、遅刻をしてしまったらどうしようかと思う。	73	82	69	58	35	.71
不21：子どもとうまく関われるのかが不安になる。	24	62	85	93	53	.00*
不25. 子どもの発達段階や興味に応じた制作活動を提案できるだろうか。	3	16	78	142	78	.28
不28. 先生方とコミュニケーションをとれるか心配になる。	9	46	69	119	74	.02*
不29. 実習を最後まで頑張れるか心配になる。	44	77	74	67	55	.00*
不30. 実習で、上手にピアノを弾けるかどうか心配になる。	27	38	31	74	147	.00*
不31：実習のことを考えると、何となく全体的に不安になる。	7	14	43	86	167	.23
不32：子どものけんかに、適切に対応できるか不安だ。	6	22	49	148	92	.04*
不35：他の実習生と比較されないか気になる。	14	26	67	105	105	.00*
不38：子どもが私の言うことを聞いてくれるか不安だ。	4	18	83	142	70	.01*
不39：絵本や紙芝居を上手に読めるか気がかりだ。	17	52	86	107	55	.00*
不43：子どもの前に立って話などができるか不安だ。	15	16	63	106	67	.00*
不44：実習先の方針に合わせるができるか不安だ。	14	54	97	96	56	.00*
不47：実習先が自分に合っているかが不安だ。	19	38	60	91	109	.00*
不48：部分・責任実習の指導案を書くことができるか心配だ。	6	20	28	99	164	.00*
不49：保育中、私のせいで子どもにケガをさせてしまわないか心配だ。	5	23	71	103	115	.00*
不52：実習日誌がきちんと書けるか心配だ。	8	33	44	88	144	.00*
不53：子どもがケガをした時に適切に対応できるか不安だ。	1	7	50	130	129	.00*
不55. 今現在、得意なことが無いことに不安を感じる。	19	44	72	80	102	.22
不57. 子どもを自分の方に引きつけることができるか不安だ。	3	14	66	124	90	.00*
不59. 大学で学んだことを実際に生かせるか不安だ。	6	20	75	119	97	.00*
不60. 責任実習で、自分が一日保育をすすめられるか心配だ。	3	6	26	74	208	.00*

注1：「不安感」に対する回答の選択肢は「まったく不安ではない」から「とても不安」の5段階である。

2： $\chi^2$  検定、 $p^* < 0.05$

表 2 不安に関連する項目の因子および項目

第一因子：子どもへの対応不安

- 不53：子どもがケガをした時に適切に対応できるか不安だ。
- 不49：保育中、私のせいで子どもにケガをさせてしまわないか心配だ。
- 不6：部分実習用の絵本や紙芝居は、適切なものを選択できるか心配になる。
- 不25：子どもの発達段階や興味に応じた制作活動を提案できるだろうか。
- 不57：子どもを自分の方に引きつけることができるか不安だ。
- 不39：絵本や紙芝居を上手に読めるか気がかりだ。
- 不1：子どもの状況にふさわしい声掛けができるか不安だ。
- 不3：子どもが興味・関心を持っていることを自分が知っているか不安だ。
- 不38：子どもが私の言うことを聞いてくれるか不安だ。
- 不18：部分・責任実習で、自分が計画した活動を子どもが楽しんでくれるか心配になる。

第二因子：部分・責任実習不安

- 不48：部分・責任実習の指導案を書くことができるか心配だ。
- 不60：責任実習で、自分が一日保育をすすめられるか心配だ。
- 不31：実習のことを考えると、何となく全体的に不安になる。
- 不47：実習先が自分に合っているかが不安だ。
- 不55：今現在、得意なことが無いことに不安を感じる。
- 不30：実習で、上手にピアノを弾けるかどうか心配になる。
- 不52：実習日誌がきちんと書けるか心配だ。

第三因子：実習生適応

- 不5：実習生としてふさわしい服装や振る舞いができるか不安だ。
- 不8：先生に礼儀正しく振る舞えるか不安だ。
- 不44：実習先の方針に合わせることができるか不安だ。
- 不4：実習用の先生方に厳しく注意や叱責を受けるのではないかと心配だ。
- 不12：指導担当の先生と良好な関係が築けるか不安だ。
- 不11：大きな声を出して保育ができるか不安だ。

第四因子：体調管理不安

- 不16：実習期間中に、体調を崩さないか心配になる。
- 不2：実習期間終了まで、自分の体力がもつか心配だ。
- 不15：実習期間中、睡眠時間を十分に確保できるか心配だ。

潜在変数から「不安感」へのパスでは「部分・責任実習不安」および「実習生対応」の2つが有意になり、パス係数はそれぞれ.44および.26であった。

図1に示したモデルについて、1学年と2学年による多母集団同時分析を行った(図2、図3)。モデルの適合度指標は、GFI=.83、AGFI=.79、RMSEA=.039となり、全体の結果と比較してGFIおよびAGFIは下がったものの、RMSEAは上昇した。

1学年および2学年のモデルにおいて、各潜在変数から不安に関連する各項目へのパスではすべて有意な係数を示した。一方、各潜在変数から「不安感」へのパスでは1学年では「部分・責任実習不安」のみ有意であるのに対し、2学年では「部分・責任実習不安」および「実習生適応」の2つにおいて有意なパス係数が示された(表3)。1学年および2学年ともに有意な係数を示した「部分・責任実習不安」から「不安感」へのパス係数は、1学年では.56、2学年では.49であった。

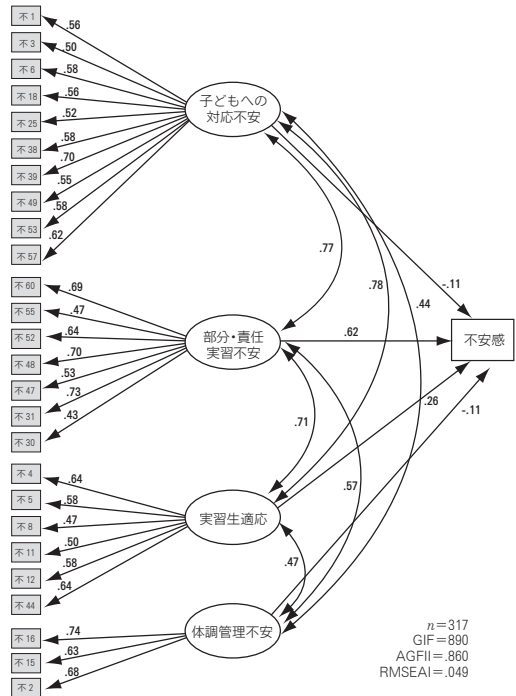


図1 不安感の構成モデル(全体)

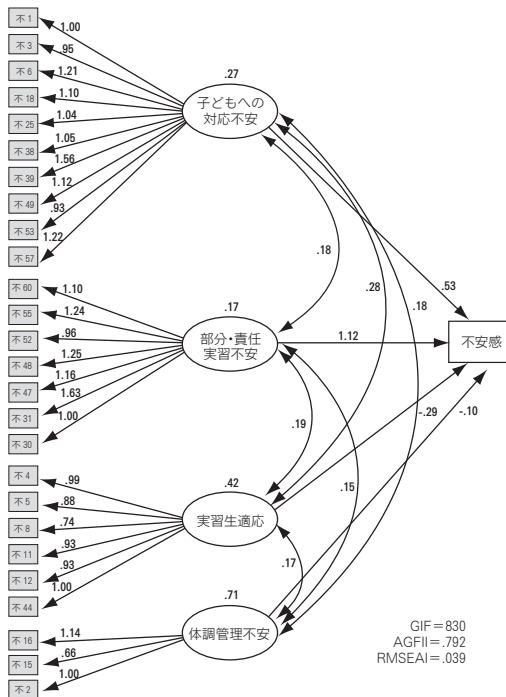


図2 不安感の構成モデル（1学年）

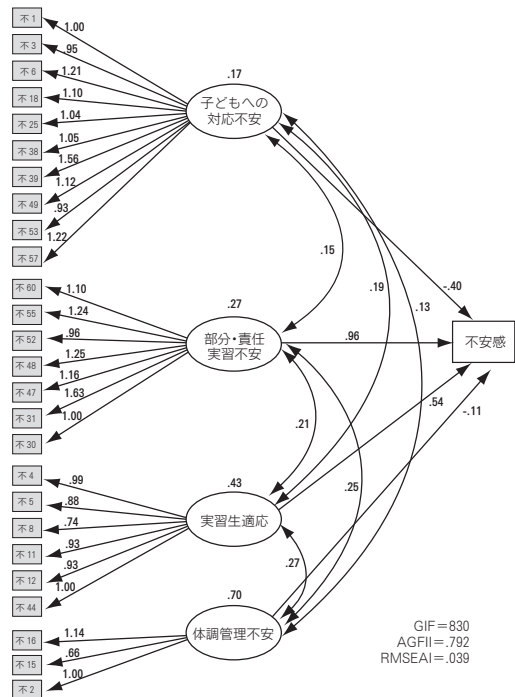


図3 不安感の構成モデル（2学年）

表3 不安感の構成モデルにおける多母集団同時分析の結果

学年 (n)	不安感の因子		
	子どもの対応不安 →不安感	部分・責任実習不安 →不安感	実習生適応 →不安感
1学年 (132)	.33	.56*	-.22
2学年 (185)	-.17	.49*	.35*

\*  $p < .05$

## IV 考察

### 1. 学生の実習に対する不安感について

資格や免許等の取得にかかる実習は、大学等での講義や演習等で学んだことを実践する場として、また講義や演習等では学ぶことができないことを体験として学習することができる重要な機会として位置づけられる。実習は学生に対して学びの貴重な機会である一方、大きなストレスや不安を抱えることにもなる。よって、保育士資格や幼稚園教諭免許状にかかる実習と不安に関する研究は数多く行われている<sup>3), 4), 5)</sup>。平成28年1月現在、NII 学術情報ナビゲータ (Cinii) で「実習」および「不安」で検索すると709件、さらに「保育」および「実習」、「不安」で検索すると65件が表示され、保育士や幼稚園教育に関する実習のみならず、看護や介護を含めた領域等でも実習に関する不安が研究テーマとして取り上げられてい



る。検索された実習と不安に関する先行研究では、本研究に扱った内容と同様に学年別での不安感の変容の様子を記載したものや不安感の構成要素に言及したものも見られるが<sup>4)</sup>、不安感の構成要素をモデル化することによって学年別での変化を探索したものは少ない<sup>3)</sup>。この点において、本研究での分析は、今後、実習に向かう学生の不安感を解消していくための手だてを構築する基礎になることが期待された。

## 2. 多母集団同時分析における結果の考察

本研究では、不安に関連する項目を構造化し上で、学年別の差異を確認するために、共分散構造モデルによる多母集団同時分析を行った。その結果、「不安感」に向かう不安に関連する項目の因子（潜在変数）のうち、1学年では「部分・責任実習不安」のみで有意なパスが、2学年では「部分・責任実習不安」および「実習生適応」の2つの因子で有意なパスが確認された。このことにより、1学年よりも2学年において具体的な不安要因が増加していると考えられた。さらに、1学年および2学年において有意となった「部分・責任実習不安」の係数の比較で、若干ではあるが2学年の方が減少しており、過去2回の実習を経験していることが部分実習や責任実習という実技を伴う実習行為に対して不安の緩和に効果を示していると推測された。つまり、実技を伴う学生の実習不安の軽減や緩和に対しては、経験してみるものの有用性が示唆され、実習指導の中に実際に行ってみるといふ指導を含めることが効果的であると考えられた。

## 3. 本研究の限界

本研究の限界として、第1に不安に関連する項目の構成についてである。本研究では、予備調査として学生が感じる不安について記述してもらい、その記述内容から不安に関連する37項目を設定した。さらに、因子分析を行うことで不安に関連する項目を26項目に絞った上で共分散構造モデルを作成した。先行研究では、本研究で取り上げた不安に関連する項目以外のアプローチによる不安項目の設定もされており、今後、より包括的で全体的な不安感を構成する項目の設定が求められる。なお、本研究における項目群の内的信頼性はクロンバック $\alpha$ により確認されている。

第2に、共分散構造モデルを作成する際のモデルの適合度についてである。因子分析の結果を用いた初期モデルでは十分な適合度を確保することができなかつたため、不安に関する項目の誤差変数間を共分散で結ぶことによって適合度を上げた。誤差変数とは考察の対象となっている構成概念では説明のつかない結果側の変数の変動を生み出す要因としてモデルに導入された変数のことであり<sup>6)</sup>、この誤差変数間の共分散によってモデルの適合度を上げたということは、本研究で採用した不安に関連する項目群だけでは不安感を完全に説明することができなかつた可能性を示唆しているため、第1の限界と同様に不安に関連するより包括的な不安感の項目設定が必要となる。さらに、本研究で採択した共分散構造モデルでは不安感に向かう潜在変数で有意なパスとして示されたものが1つあるいは2つであったため、より現実に即したモデルの形成が必要であると考えられた。

第3に、本研究の調査対象が単一の保育者養成短期大学で実施されているという点である。保育者養成短期大学の地域性による顕著な差異があることは想定されないが、学生の学力や意識等の基礎的背景や、大学および短期大学の実習等に対する指導方法等は異なっている可

能性は十分に予見できる。それらの背景も考慮した学生の不安感についての調査・分析が必要であると考えられた。

## V おわりに

本研究により、不安を構成する要因の学年による差異が明らかになったとともに、不安感および不安感を規定する要因の構造化の可能性が示唆された。また、学生の実習に対する不安感を取り除き、自信をもって実習に取り組むことができるようにするための具体的な指導法に援用することが可能であると考えられた。

### 参考文献

- 1) 厚生労働省、指定保育士養成施設一覧、  
[http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/HP\\_11.pdf](http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/HP_11.pdf)  
(2015.1)
- 2) 馬場康宏・田中浩二、学生の幼稚園・保育所実習に対する不安および期待、東京成徳短期大学紀要、47、p.77-88、2016
- 3) 越智幸一・佐藤貴虎、短大生の保育実習不安について、旭川大学短期大学部紀要、42、p.11-18、2012
- 4) 真下あさみ・太田由美子 他、保育学生の実習に対する不安について、研究紀要、33、p.27-37、2012
- 5) 大谷彰子・平化恵美子、保育者養成課程における実習に対する課題と不安の変容、甲子園短期大学紀要、30、p.67-73、2012
- 6) 豊田秀樹、共分散構造分析 入門編 ー構造方程式モデリングー、朝倉書店、1998